



# 日本洋書協会

JAPAN ASSOCIATION OF INTERNATIONAL PUBLICATIONS

May 2014  
REPORT MAGAZINE

会報誌 | vol. 48 no. 3

Published by JAIP 1-32-5 U.S.P Higashishinagawa Shinagawa-ku, Tokyo 140-0002

Call:03-5479-7269 e-mail:office@jaip.jp

## 理事会報告

### 2014年3月5日 (水)

出席：土方理事長、グレシャム副理事長、山川理事、相澤理事、松村理事、小松崎理事、細谷理事（河村総務委員長、事務局）

#### 1. 予算状況

2月終了時点での説明と3月の収支見込みに付いて事務局から説明があった。

ほぼ予算通りの推移で、特別会計に100万円を戻しても次期繰り越しが200万円程度出る見込み。

#### 2. 総会に向けて

##### (1)定款改定

個人会員新設に伴う定款改定の総務委員会案が提示され、了承された。最終決定は総会決議による。

##### (2)2014年度予算案策定

総務委員会案が提示された。予算と決算の乖離を防ぐため、収入は現実的な値とし、支出は前年度の予算を踏襲したとの説明があった。

詳細の討議では文化・厚生委員会の新企画を支援するため、同好会費の増額セミナーの内容などが話し合われた。

##### (3)総会（5月16日）までのスケジュール

3月末 予算締め、決算報告（案）作成（事務局）

4月4日 会計監査（唐澤、宮川監事+事務局）

4月9日 決算承認、予算案確定の理事会

4月16日 会員向け総会案内発送（メール添付）

\*総会の統括は総務委員会が行う

\*総会時のセミナーは行わない

\*総会後の懇親会は総務委員会主催

#### 3. 理事長から

##### 委員会報告

メディア広報委員会（山川担当理事）

連載中の「この人に聞く」の次回は若手を集めた座談会を行いたい。またDHインターナショナルの大川氏のインタビュー記事は、会報5月号に掲載予定。

### 2014年4月9日 (水)

出席：土方理事長、相澤理事、松村理事、小松崎理事（河村委員長、事務局）

#### 1. 2013年度決算承認

事務局から4月5日に唐澤・宮川両監事による会計監査が無事終了した旨報告があった。討議の結果承認され、総会に諮ることとした。

#### 2. 2014年度予算案策定

最終案を策定した。

収入の部では年会費に新規入会社の分と個人会員3名分を加える収入減が見込まれるため、支出の部を圧縮することとした。

以下の項目を変更する。

セミナー等開催費 ¥200,000 → ¥100,000

活動費、理事会 ¥60,000 → ¥30,000

懇親会費（夏）¥650,000 → ¥600,000

懇親会費（関西）¥150,000 → ¥100,000

ただし活動を制限するわけではなく、セミナー等必要な活動はいろいろ工夫をして行っていく。

以上の内容で総会に諮ることとした。

#### 3. 入・退会承認

入会：(株)ヴィアックス（賛助会員）

退会：(株)ケンブリッジユニバーシティプレス、エルゼビアジャパン(株) 以上を承認した。

#### 4. 理事長から

##### 委員会報告

##### ・総務委員会

4月15日に総会準備の委員会を行う。

##### ・文化・厚生委員会

4月25日に横浜美術館の見学会を行う。

#### 5. その他

総会に向け、理事長、総務委員長、事務局で最終打ち合わせを行う。

# JAIP 東大図書館見学報告

UPS 仕入課 遠藤尚子

東京大学附属総合図書館は、赤門を入ってすぐのところにある。しかし今は新館建設の改修工事のため、正面玄関からではなく、東側の仮出入口から入る。荷物を預け、配布された資料を参考にしながら、司書の三浦さんという女性に案内していただく。

今の総合図書館は、1923年の関東大震災のときに焼失したのを、アメリカのロックフェラー財団より寄附を受けて、1928年に建てられたものだそうだ。設計は、内田祥三。内田は、総合図書館のほかに安田講堂、東大附属病院の研究棟、法文1号館など、東大の建築を数多く手がけており、その様式は「内田ゴシック」と言われている。

図書館の外観は、なるほど「内田ゴシック」と呼ばれるのにふさわしい、堅牢で荘重な建物である。内装も格式高く美しく、なかでも洋雑誌閲覧室は、以前は「貴賓室」として皇族をはじめとする来客用の部屋として使われていただけあって、天井にはシャンデリア、壁には鹿の首の剥製、書画などが飾られ、なんとも豪華だ。ただ、おかれている洋雑誌の数は少なかった。これは近年、オンライン・ジャーナルが多くなったためだ。

閲覧室や開架図書を見てまわったあと、閉架の書庫に入る。薄暗い明り、かすかにカビくさい古びた本の匂い。なかは天井が低く、鉄骨と強化ガラスの床がいかにそっけない。古い洋書の棚のあたりを見せていただいたのだが、驚いたのはおおざっぱな図書分類番号があるだけで、並びがランダムだったことだ。納本された順においてあるとのことだったが、これでは探すのが大変だろう。

関東大震災で図書館が焼失した後、国内はもとより海外からも書物の寄贈が多く寄せられたそうだ。国内では、森鷗外の遺族が、鷗外の蔵書約18,000冊を寄贈した。この「鷗外文庫」のいくつかを見せていただいた。なかでも『膳部之事』というのが印象に残った。鷗外の自筆写本で、料理の配膳のしかたや、食器類の説明などが彩色をほどこした絵で示されている。難しい本ばかり読んでいるのでは、と思っていた鷗外が、こんな家庭的な本を写本していたのが、なんだかほほえましかった。あの口ひげをたくわえた、しかつめらしい顔で、鯛の尾頭付きに色をつけている姿を想像すると、おかしくなってしまう。

見学の最後に、男性職員が木箱をだいじそうに

持ってきた。木箱の中には、布に包まれた大きな白い革張りの本が入っている。慎重になかから取り出して、ゆっくりと本を開く。

思わず「うわー、きれい」と声が出てしまった。細密な挿絵と美しい飾り文字が、上質な紙のやわらかい白さの上にくっきりと際立って、目に飛びこんできた。それは、ケルムスコット・プレスの『チャーサー著作集』だった。ケルムスコット・プレスとはウィリアム・モリスが設立した私設印刷所（プライベート・プレス）で、「美しい書物」を作ることを目的に、少部数できわめて芸術性の高い書物を製作した。『チャーサー著作集』は、そのケルムスコット・プレスの最高傑作とも言われている。挿絵が美しいのもっともで、エドワード・バーン＝ジョーンズの作である。全体のデザインや飾り文字だけでなく、活字自体もモリスが考案するというこだわりようだ。世界三大美書のひとつといわれるのも、うなずける。

しかし後日、稀覯本を扱うロンドンの古書店のオンラインショップで、この本が2冊売りに出されていて、それぞれ15万ポンドと6万5千ポンドというのを見たときには、正直、あいた口がふさがらなかった。装丁の違いや保存状態で価格に差が出るのだろうが、あいだをとって10万ポンドとしても、今の日本円で1700万円だ。値段を知ってにわかにはありがたみが増してしまうのが、庶民の悲しいところだ。あー、もうちょっとよく見とけばよかった。すごい真打ちが、トリに控えていたものである。

以前、国会図書館の見学にも行ったが、あちらがあらゆる書物の収蔵・保管を目的としているのに対して、こちらはやはり研究のため、読まれるための図書館だと感じた。現在、新図書館を建設中であるが、大学図書館の新しい形とはどのようなものになるのか、完成がたのしみだ。

最後に洋書協会の見学会らしい統計資料をひとつ。東京大学附属図書館（総合図書館、駒場図書館、柏図書館、各学部、研究所等の32の部局図書館（室））の図書の合計は（2013年3月31日）、9,266,963冊。うち洋書は、4,385,263冊、約47%、逐次刊行物は、160,184タイトル、うち洋書は75,841タイトル、約47%、2012年度資料費は、じつに14億9212万円である。（東京大学総合図書館見学案内資料より）

# The London International Book Fair 2014

A hearty “hello” to friends old and new and a fond “farewell” to the venue itself, Earls Court – this was LIBF ’14. Although I attend the Frankfurt Book Fair each year I don’t get to London with the same frequency – maybe 6 or 7 times in total, and all but the first have been at Earls Court for me. It was only 2 or 3 years ago when I had an appointment with a publisher scheduled in aisle “P” that I realized there was a second building in the back . . . the aisles in the front building only go as far as “O” and I was, for a short while, completely mystified about where aisle “P” might be!

This does, however, say something about the nature of the business I/we are in: Earls Court 1 (as it is called) is home to UK and US publishers whereas Earls Court 2 (the building in the back) is home to non-English language publishers as well as companies vital to our industry – printers, technology companies and logistics companies. If I go to Olympia next year (site of LIBF ’15) I’ll need to learn the layout all over again . . . but perhaps it won’t take me 3 or 4 years to do so!

I showed up on Tuesday morning with a much lighter schedule than I would normally have in Frankfurt – only 5 or 6 scheduled appointments each day. The idea was that I would spend more time this year exploring the digital world in hall 2. Alas, it was a plan that was destined to fail. With around 150 publishers in the UPS stable, some larger, some smaller, it was only a matter of time until I ran into someone with whom I had not made an appointment but who desperately wanted a brief conversation or had something to show me. Fairly soon my relaxed London schedule resembled my frantic Frankfurt schedule. The weather was very pleasant so more than one of these unscheduled meetings took place out on the front steps in the warmth of a London Spring day, often over a cigarette that I had probably bummed from the other person since I “officially” don’t smoke anymore!

The mood seemed very positive and upbeat but I did find myself frequently explaining the effects of the

sudden fall in the value of the yen against both dollars and pounds over the course of calendar year 2013 and how this meant that books were 20-30% more expensive in that year than in 2012, even if the original published prices remained unchanged. With much of our business ultimately dependent on fixed or even declining university budgets, this, of course, meant for most publishers a drop in their sales to Japan, an explanation that was supported by colleagues from other Japanese booksellers who had the same story to tell. There were, of course, some bright spots which were heavily dependent on particular publishing projects and luckily many of the publishers told me of more bright spots to come. “Abenomics” is well known (and presumably understood) in the US and Europe so that the exchange rate issues were accepted, if not entirely welcome, as the cause of the decline in sales to Japan. Unlike some meetings I’ve had in the past, there were none this time that were “difficult” or “uncomfortable”. Publishers were interested in what they perceive from afar as a healthier Japan and look forward to this having some effect on their sales into Japan in the future.

So, it was a busier fair than I had planned and one that continued to underscore the importance of the printed book as well as the digital offerings. And Frankfurt is now less than 6 months away!

Mark Gresham (United Publishers Services Limited)



## この人に聞くシリーズ No.3

**大川博通氏**

(ディー・エイチ・インターナショナル株式会社)

山川: 本日はお時間をいただきありがとうございます。事前にお伝えしましたが、協会の会報に「JAIPこの人に聞く」という企画がありまして、協会のさまざまな方面の方にお話を伺い、皆様にご紹介しています。今回は長年商社で活躍されたご経験のある大川さんに、洋書協会とはひとつ違った視点も交えてお話を伺えればと考えております。2010年2月に国際書房が民事再生法適用に至った際、第一法規(の100%出資子会社)が事業譲渡を受ける形で事業が承継され、現在のDH国際書房となったわけですが、その後の経営を立て直すにあたってどのように取り組まれてきたのか、差支えない範囲でご説明いただけますでしょうか?

大川: はい。背景としては第一法規が法律関係の本をたくさん作ってきたということがあります。つまり、大学の法律関係の先生方に育てられ、一緒に育ててきたということです。国際書房の経営が難しくなったとき、その大学の先生方から第一法規の顧問弁護士を通して話が合ったのです。

私は商社の出身でM&Aを数多く見てきましたので、たとえば当社の戦略に合うかとか、マネージャブルなのか、あるいはトータルリスクや将来性はどうかというように、さまざまなチェックをしますし、そのようなことが大変気になっていました。

一方で、第一法規という会社は、第一法規出版という社名だったのですが、その「出版」を11年前に取り「法律に関するすべてを情報提供する会社」という位置づけをしました。この点では、よりグローバルな目で見ていかないといけないし、国際書房のビジネスは我々にとってセンサー機能にもなるかもしれないというような考えもありました。

国際書房の経営を引き受けるにあたって、商社の感覚でいうと、お引き受けできない案件だったと思います。しかし、第一法規としては国際書房がお世話になった方々はわれわれのお客様もあって、その方々に役立つことを国際書房がしていたのなら、それを続けるのはわれわれの義務かもしれない。育ててくれた人たちにお返りするべきだと考えたわけです。

山川: 大川さんはこの業界に入られて、国際書房を立て直す中で、この業界に対してどのようなことを感じられましたか?

大川: まず、業界全体を把握するのが難しいということです。私は商社出身ですが、商社は基本的にほかの方が作ったものを間に入って扱います。したがって、これはいったいどれぐらいの市場で、その内のシェアはいくらで、ということ把握してからターゲットを決めていくという、普通のマーケティングの手法で考えます。ところが、この業界は需要もシェアもいったいどれだけあるのかよく分からないのです。だからターゲットも決められない。こんな

難しい業界はちょっとないという印象を持ちました。

山川: なるほど。それで実際はどうされたのですか?

大川: 経営するといっても、われわれのお客様はほとんどが大学ですから、大学の予算をある程度見て、その中でうちのシェアがどれぐらいで、他社がどれぐらいとか、それでそれをどこまでもついでいきますか?ということぐらいしかできませんでした。この業界で私のような者が少し大きい網の打ち方で物を捉えようとするのは少し難しかったです。

では、どうやって立て直すのか?従業員も全部引き受けていますから、その方たちが普通の生活ができるようにもついでいこうということは意識しました。それに、発足が「お役に立つんだ」ということからきているので、その思想はなんとか守れるようにしました。

当社のセールスマンは当然お客様第一で、先生一途に物事を考えています。それは決して悪いことではないのですが、そこには経営の目を入れなければいけません。お支払はいつでもいいですよとか、値段は言うとおりにしますよとか、そういうことは変えていかなければなりません。そうことに約2年はかかりました。これは私どもの会社の話であって、一般的かどうかは分かりませんが、

山川: 洋書の書籍のビジネスというのは文化産業であって、そういう信頼関係において発展したところがありますが、今はもうそういう信頼関係がなくなってしまった領域も少なくありませんね。

大川: もちろん、信頼関係は常にベースになるものですが、アメリカの経営学者のコトラー(Philip Kotler)ではないですが、マーケティングのプロダクトとプライスというような考え方は大事だと思います。我々のような業種の場合、プロダクトはひとさまに作ってもらわなくて、それがどういう物であるのかというのを必ずつかまないとはいけません。それから、売るのはこちらですから、どこにどうやって売るのが考えなければなりません。売る相手は大学中心になりがちですが、本当にそうか?法律の本に限って考えても、弁護士事務所の法曹関係もあれば、企業もある。商品も書籍だけでなく電子商品もあるでしょうし、いろいろ考えられると思います。また、どの程度の需要があるのかということも考えなくてはならない。コトラーさんのいうプロモーションですね。これをいままでは考えないか、考える余裕がなかったのだらうと思います。

山川: 確かに、先生方の要求に応じたオンデマンドの仕事をしていると、なかなか提案型営業をするのは難しいですよ。

大川: そうです。この会社を引き受けてみて感じたのはそのあたりで、まずは頭の切り替えをしてもらわなくてははいけません。

洋書の業界といっても、昔の業界というのはあったかもしれませんが、もうそれは違うのですよね。第一法規もそう

ですが、今後われわれはどのような方向に向かうのか、どこに焦点を絞っていくのか、電子商品などにどう対応していくのかを考えていかなければなりません。福武書店がベネッセになりましたが、あそこまで考えるのか？当社で言えば、例えば、受験産業を取り込むということも考えられますよね。それをM&Aで獲得してもいいですし、われわれが出版とか情報売るのであれば、それを取り巻くもっと大きな仕組みの中でやることも可能ではないかと。

山川：そうですね。おっしゃるとおりです。

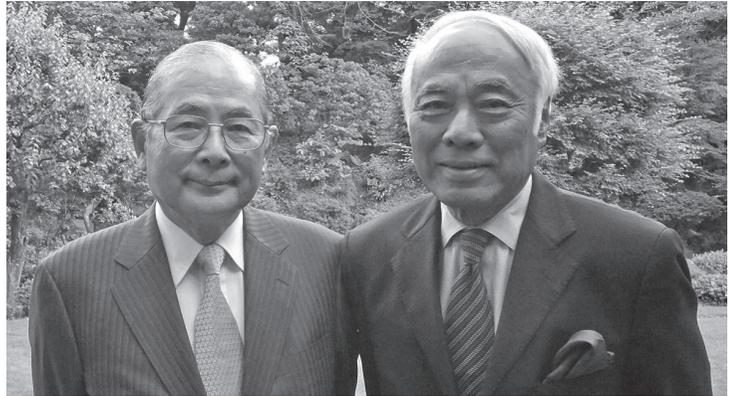
大川：トリガーになるようなコアの資金があるのだから、それを利用してやればかなりのことはできると思います。もちろん、ベースには「社会のお役に立つ」ということなのですが、収益を上げようとする、結局は寡占に近い状態にしなければうまくいきませんよね。おそらく、過去の洋書業界もある意味で事実上の寡占状態にもっていったのではないかと思うのです。

山川：洋書というのは西洋の科学技術文化の輸入であって、その専門業者から買わなければならないという常識もあったわけです。しかし、今はもうだいぶ違って、若い人にとっての洋書はAmazon.comから買うものというのが常識ですからね。そのような状況の中で今目指さなければいけないのは、そういう先生との関係は保ちつつ、提案型営業に切り替えるということでしょう。提案型営業には商品が必要ですが、多くの書店が抱えている問題は、よい商圈、よい顧客を持っているけれど、よい商品がないということです。よい商品を開発して、それを売れるように社員を教育しなければならない。大変なエネルギーが必要になりますね。

大川：そうですね。私のようなキャリアの人間から見ると、そのためにはどちらかというと仕入れが大事に思われます。今から50年以上前は、商社も売る人と仕入れる人が別でした。そして仕入れる人のほうが偉かったのです。要するに「利は元にある」ということです。ところが、途中から、やっぱり同じ人間がやったほうが良いというふうに変ってきたのです。

今、DH国際書房では売り手と仕入れ手が別なのですが、仕入れの人は、もっと相手の需要や思いというものを感じないと駄目だと思っています。一方、売る人は、顧客の思いや何をやろうとしているのかという情報を仕入に活かしていかないとイケません。今は分かれています、本当は、もう少しその部分を何とかしたいと思っています。

山川：確かに、仕入れの人が営業をリードしている会社は強いですね。われわれも目指しているのですが、まだまだです。でも、国際書房さんだけでなく、顧客の役に立って、しかも商売をさせていただくには、やはりそこが鍵になりそうですね。



大川：はい。仕入れという情報源をどのような形で効率的に活用するかということなのだと思います。そこで、今、いろいろな効率化のためのツールをどんどん与えてみるということをはじめているところで。

山川：具体的にはどういうことですか。

大川：たとえば全員にタブレットを持たせたりしています。信じられませんが、前は携帯も持たないという営業もいましたからね(笑)。でも、タブレットを持ったら、もう自由にやれるわけです。セールスマンが直接仕入先に問い合わせもできます。もちろん仕入れ担当者の知識には及びませんが、担当者がいない時もありますから。夜中でもメールを送っているようですよ。そういうのは年寄りだと難しいですが、若い人はやりだしたら楽しくてしょうがないみたいですね。ちょっと感覚のあるセールスマンなら、うまく利用して、先生こういうのはどうですか？って言えるはずなのです。そうしているうちに、持っている情報量が増えて、どんどん厚みが出てくるのではないのでしょうか。

山川：最後にこれまでと少し違うことを一つお聞きしたいのですが、これから日本はどうしなきゃいけないと思いますか。

大川：日本のですか？そういう大きな…(笑)。笑われるかもしれませんが、私はまったく楽観的です。何も心配することないと。日本人というのは、その時その時に結構きちっとやってくるよと。だから、なんというか、人を大事にするとか、命を含めてですけど、それをみんなが忘れないようにさえすれば全然問題ないというふうに思っています。だから、あまりこういうふうになくちゃ駄目じゃないかとか思わないのですよ。昔の言葉でいう「司・司」でね、与えられたものとそれをきっちりパフォーマンスしていく気持ちさえあれば、ちゃんとできますよというふうに思っています。

山川：われわれの商売にしてもそうですね。なるほど、DH国際書房では古くから脈々と受け継がれる伝統と新しい考えがうまく融合していることが良くわかるお話で、私も考えさせられるところがございます。長時間にわたり、興味深いお話を聞かせていただきまして、ありがとうございます。

## 2013年(平成25年)1月～12月 洋書輸入・輸出統計

藤村 裕二

15年の長きに渡って「通関統計」を執筆されてきた荒木亮一さんが昨年の5月号(522号)をもって卒業されました。改めて長年のご苦勞に感謝申し上げたいと思います。これに伴い、今回はピンチヒッターとして執筆させていただくことになりましたのでよろしくお願ひいたします。

今回も、例年と同じく、3月に公表された、直近の2013年の統計に関して報告させていただきますが、筆者の勉強の意味も含め、改めて「通関統計」に関しておさらいをしておきたいと思います。

この記事の表題は、「洋書輸入・輸出統計」となっていますが、正確には絵本を含む洋書と洋雑誌、それに楽譜や地図、カレンダーなどを含む「印刷物」に関する統計です。元になっているのは、財務省(関税局調査課)が毎月発表している「貿易統計」のうちの「普通貿易統計」のデータです。(URLは、<http://www.customs.go.jp/toukei/info/index.htm> です)

「貿易統計」は、1類の「動物」から97類の「美術品」まで品目毎に細かく分類されていますが、個々の品目は6桁の国際標準コード(H.S. Code)に日本独自の3桁を加えた9桁のコードで表されています。このコードは、通関時の申告書作成等でご存知の方も多いかと思いますが、洋書や外国雑誌は49類の「印刷した書籍、新聞、絵画その他の印刷物並びに手書き文書、タイプ文書、設計図及び図案」という項目に含まれています。49類の中は更に細分化されていますが、個々の品目は本文の各集計表をご参照ください。また、下記のサイトでは統計品目全体の詳細が確認できます。

(<http://www.customs.go.jp/toukei/sankou/code/code.htm>)

「貿易統計」の金額については、これも通関書類作成でご存知かと思いますが、輸出についてはFOB(本船渡し条件)、輸入についてはCIF(運賃・保険料込み条件)の価格で集計されます。因みに、最近関心を集めている「貿易赤字」は「貿易収支」の赤字(輸入が輸出を上回る)のことですが、「貿易統計」における「貿易収支」の他に、日銀と財務省から、「国際収支統計」の「貿易収支」も公表されています。ただし、「貿易統計」が通関ベースであるのに対して「国際収支統計」は決済ベースであり、輸出・輸入ともFOBで集計されるため、それぞれの「貿易収支」の数値には差異がでてくることになります。

また、統計は全て通関時に申告された円価格によって行われますが、外貨建ての貿易の場合は、税関が公示したレート

(「税関長公示レート」)にもとづいて換算した金額で申告されます。したがって、当然ながら、貿易における実際の決済金額(レート)とは差異が出ることになります。

尚、この報告では主に書籍、雑誌とその関連品目を中心とした統計数値について集計しています。また、作成した集計表も例年のものから若干変更していますのでご了承ください。それでは、具体的な統計内容に入っていきたいと思ひます。

## (1) 輸入額

## 1. 書籍・雑誌の輸入額

## 1) 2013年の輸入額(表1)

全体としては2012年に比べて約8%の増加となっています。また、書籍と雑誌それぞれも同様の伸びとなっています。ただし、2012年と2013年の為替相場を見てみますと、年間平均レートがドルで約22%、ユーロで約26%の円安となっていますので、金額の増加はこの影響が大きいと思われます。また、この表には載せていませんが、冊数に関して統計のある事典や雑誌、絵本については、2012年に比べて2013年は約15%減少しています。こうしたことから、詳細は後述しますが、原価ベースでは金額が減っているものと推測されます。

(表1)2013年の書籍・雑誌関連品目の輸入額

(単位:百万円)

分類	品目	2012 輸入額	2013 輸入額	前年比	構成比
印刷した書籍、 小冊子、リーフ レットその他これ らに類する印刷 物および絵本	単一シートのもの	664	680	102.4%	2.1%
	辞典および事典	64	78	121.9%	0.2%
	その他のもの(書籍)	19,997	21,845	109.2%	67.9%
	幼児用の絵本及び 習字本	3,072	3,111	101.3%	9.7%
	小計	23,797	25,714	108.1%	79.9%
新聞、雑誌その 他の定期刊行 物	1週に4回以上発行 するもの	2	5	333.3%	0.0%
	その他のもの	5,981	6,444	107.7%	20.0%
	小計	5,983	6,449	107.8%	20.1%
合計		29,780	32,163	108.0%	100.0%

## 2) 最近10年間の輸入額の推移(表2)

10年間の推移を見てみますと、長期的な輸入額の落ち込みが顕著に表れているのが分かります。10年前の2004年を100とした場合、2013年は書籍で69、雑誌は44、合計では62と大幅に減少しています。世間で言われている本離れが洋書の世界で

も進んでいるということかと思いますが、雑誌に関しては電子化の影響も大きいのではないかと思います。前項で述べた2013年の輸入額と同じく為替の影響もあるかと思いますが、単に為替の影響だけとは言い切れないと思われます。やはり、10年というスパンでは原価ベースでも減っているものと推測されます。

(表2)最近10年間の書籍・雑誌関連品目の輸入額の推移

(単位 百万円)

品目	印刷した書籍、小冊子、リーフレットその他これらに類する印刷物および絵本					新聞・雑誌			合計					
	単一シート	辞典・事典	その他(書籍)	絵本	小計	輸入額	前年比	指数	輸入額	前年比	指数			
年度	輸入額	前年比	輸入額	前年比	輸入額	前年比	指数	輸入額	前年比	指数	輸入額	前年比	指数	
2004	284	134.0%	316	108.2%	32,730	89.2%	3,756	110.4%	37,088	91.4%	100	14,575	87.0%	100
2005	337	118.7%	241	76.3%	30,111	92.0%	4,073	108.6%	34,767	93.7%	94	15,353	105.2%	105
2006	173	51.3%	154	63.9%	30,787	102.2%	4,546	111.5%	35,660	102.6%	96	16,259	105.9%	112
2007	307	177.5%	128	83.1%	29,580	96.1%	5,066	111.4%	35,081	98.4%	95	15,824	97.2%	109
2008	242	78.8%	179	138.8%	26,927	91.0%	3,881	76.6%	31,229	89.0%	84	13,300	84.0%	91
2009	221	91.3%	74	41.3%	22,920	85.1%	2,798	72.1%	25,013	83.3%	70	10,962	82.4%	75
2010	257	116.3%	107	144.6%	22,646	98.8%	2,636	94.2%	25,646	98.6%	69	9,137	83.4%	63
2011	469	182.5%	55	51.4%	21,643	95.6%	2,915	110.6%	25,082	97.8%	68	7,165	78.4%	49
2012	664	141.6%	64	116.4%	19,997	92.4%	3,072	105.4%	23,797	94.9%	64	5,983	83.5%	41
2013	680	102.4%	78	121.9%	21,645	109.2%	3,111	101.3%	25,714	108.1%	69	6,449	107.8%	44

3) 主要国・地域別の2013年と2012年の輸入額

次に、国別の輸入額について見ていきます。上位10カ国は、若干の順位の入替わりはありますが、変化はありません。(表3-a) この10ヶ国で書籍は輸入総額の95%、雑誌は99%を占めており、輸入先が一定の国に固定化している状況です。ただ、出版社、特に欧米の出版社によっては、出荷元の倉庫をアジアに置いているところもありますので必ずしも出版されている国とは一致しないものと思われます。11位～30位の国々(表3-b) に関しても若干の順位の入替わりはありますが、ほとんど変化はありません。(メキシコとポーランドが31位以下へ、フィリピンとニュージーランドが30位以内へ) 主要国(上位10ヶ国) 以上に金額が伸びています。

また、地域別の輸入額に関しては、米国と英国に加えてユーロ圏(17ヶ国)、東アジア(中国、香港、台湾、韓国)、東南アジア(ASEAN10ヶ国+インド、パキスタン、ネパール)の輸入金額を集計しています。(表3-c) いずれの表でもアジア各国からの輸入が増えているのが確認できます。

尚、この集計は主に輸入額の国毎の順位を相対的に見るためのものですので、為替の影響に関しては考慮する必要はないかと思います。

(表3-a)2013年の書籍・雑誌輸入額の上位10ヶ国

(単位 百万円)

順位	品目	書籍・辞典・絵本			新聞・雑誌・その他定期刊行物			合計					
		2012	輸入額	前年比	構成比	2012	輸入額	前年比	構成比	2012	輸入額	前年比	構成比
1	米国	7,087	7,279	102.7%	28%	3,010	3,208	106.6%	50%	10,097	10,487	103.9%	33%
2	英国	5,421	5,704	105.2%	22%	842	983	116.7%	15%	6,263	6,687	106.8%	21%
3	中国	5,954	6,325	106.2%	25%	84	112	133.3%	2%	6,038	6,437	106.6%	20%
4	ドイツ	1,821	1,796	98.6%	7%	63	36	57.1%	1%	1,884	1,832	97.2%	6%
5	韓国	797	1,139	142.9%	4%	106	229	216.0%	4%	903	1,368	151.5%	4%
6	オランダ	84	119	141.7%	0%	1,225	1,194	97.5%	19%	1,309	1,313	100.3%	4%
7	フランス	672	762	113.4%	3%	109	125	114.7%	2%	781	887	113.6%	3%
8	シンガポール	434	516	118.9%	2%	274	433	96.0%	4%	708	779	110.0%	2%
9	香港	267	545	204.1%	2%	88	103	117.0%	2%	355	648	182.5%	2%
10	イタリア	159	194	122.0%	1%	106	108	101.9%	2%	265	302	114.0%	1%
小計		22,696	24,379	107.4%	95%	5,907	6,361	107.7%	99%	28,603	30,740	107.5%	96%
その他の国々		1,102	1,335	121.1%	5%	75	88	117.3%	1%	1,177	1,423	120.9%	4%
合計		23,798	25,714	108.1%	100%	5,982	6,449	107.8%	100%	29,780	32,163	108.0%	100%

(表3-b)2013年の書籍・雑誌輸入額の11位～30位の国々

(単位 百万円)

順位	品目	2012年実績		2013年輸入額			前年比
		金額	順位	書籍	新聞・雑誌	合計	
1～10	上位10ヶ国合計	28,603	(1～10)	24,379	6,361	30,740	107.5%
11	マレーシア	149	12	262	5	267	179.2%
12	台湾	216	11	221	29	250	115.7%
13	タイ	105	15	164	0	164	156.2%
14	ブラジル	141	13	125	26	151	107.1%
15	スイス	87	16	113	1	114	131.0%
16	アイルランド	123	14	80	0	80	65.0%
17	インド	30	21	52	3	55	183.3%
18	スウェーデン	19	24	47	1	48	252.6%
19	カンボジア	46	17	44	0	44	95.7%
20	カナダ	33	19	36	0	36	109.1%
21	オーストリア	23	22	31	0	31	134.8%
22	ベルギー	32	20	20	7	27	84.4%
23	ロシア	20	23	19	0	19	95.0%
24	インドネシア	12	26	12	3	15	125.0%
25	オーストラリア	19	25	8	6	14	73.7%
26	スペイン	45	18	11	1	12	26.7%
27	ベトナム	11	28	11	0	11	100.0%
28	フィリピン	5	32	11	0	11	220.0%
29	ニュージーランド	2	38	7	2	9	450.0%
30	デンマーク	6	30	7	0	7	116.7%
小計		1,124	----	1,281	84	1,365.0	121.4%
その他の国々		53	----	54	4	58	109.4%
合計		29,780	----	25,714	6,449	32,163	108.0%

(表3-c)2013年の米国・英国と地域別の書籍・雑誌の輸入額

(単位 百万円)

品目	米国	英国	ユーロ圏	東アジア	東南アジア	その他の国々	合計
書籍類	7,279	5,704	3,026	8,231	1,074	400	25,714
雑誌類	3,208	983	1,472	474	274	38	6,449
合計	10,487	6,687	4,498	8,705	1,348	438	32,163
2013年構成比	33%	21%	14%	27%	4%	1%	100%
前年比	104%	107%	14%	116%	126%	120%	108%
2012年実績(合計)	10,097	6,263	4,476	7,512	1,067	365	29,780
2012年構成比	34%	21%	15%	25%	4%	1%	100%

2. 書籍・雑誌以外の品目の輸入額

表4は、49類に含まれる品目のうち、前段の書籍や雑誌以外の品目についての集計ですが、印刷物と言っても、洋書業界とは縁のない品物も含まれています。

因みに、デカルコマニアとは、転写印刷の技法そのものやこの転写に使う印刷された特殊な紙（原版）のことを意味するようです。10年前（2004年）と比べて大幅に増えていますし、金額的には書籍・雑誌に比べてかなり大きなものですが、49類に定められた品目の中に具体的に分類できない雑多なもの（「その他の印刷物」の中の「その他のもの」）が多い状況です。

(表4) 2013年の書籍・雑誌以外の印刷物の品目別輸入額

品目	内訳	(単位 百万円)				
		2012年 輸入額	2013年 輸入額	前年比	2004年 輸入額	2004年 との比較
楽 譜		408	418	102.5%	693	60.3%
地図、海図、地球儀		888	1,024	115.3%	928	110.3%
設計図及び図案		31	72	232.3%	136	52.9%
郵便切手・収入印紙など		18,451	12,379	67.1%	5,324	232.5%
デカルコマニア		1,093	1,312	120.0%	812	161.6%
葉書、印刷したカードなど		1,914	2,567	134.1%	1,468	174.9%
カレンダー	紙製または板紙製	2,615	2,822	107.9%	2,479	113.8%
	その他のもの	73	82	112.3%	173	47.4%
	小計	2,688	2,904	108.0%	2,652	109.5%
その他の 印刷物	広告、商業用カタログ	9,550	9,880	103.5%	6,778	145.8%
	写真	2,122	2,265	106.7%	2,411	93.9%
	絵画、デザイン	1,219	1,405	115.3%	1,898	74.0%
	その他のもの	29,097	52,670	181.0%	17,649	298.4%
	小計	41,988	66,220	157.7%	28,736	230.4%
合 計		67,461	86,896	128.8%	40,749	213.2%

## (2) 輸出額

2013年の書籍・雑誌の輸出額（表5-a）は2012年と比べて約14%の増加となっています。ただし、輸出決済に使用される通貨は、直近の集計で、米ドルが約53%、円が約35%で、両通貨合わせて90%近くになりますが、2013年は2012年に対してドルが約22%の円安となっていますので、原価ベースではほぼ横ばいと推定されます。また、最近10年間の輸出額の推移も、輸入とは異なり、為替の影響を考慮したとしても、ほぼ横ばいと見ることができます。（表5-b）

合わせて、最近10年間の書籍・雑誌の輸入額と輸出額の比率の推移を見ても、概ね輸入7に対して輸出3という状況が続いています。（表6）

(表5-a) 2013年の書籍・雑誌関連品目の輸出額

分類	品目	(単位: 百万円)			
		2012 輸出額	2013 輸出額	前年比	2013 構成比
印刷した書籍、 小冊子、リーフレットそ の他これらに 類する印刷物 および絵本	単一シートのもの	2,171	1,697	78.2%	10.9%
	辞典および事典	28	63	225.0%	0.4%
	その他のもの（書籍）	7,690	10,394	135.2%	67.0%
	幼児用の絵本及び習画本	44	49	111.4%	0.3%
	小 計	9,933	12,203	122.9%	78.7%
新聞、雑誌 その他の 定期刊行物	1週に4回以上発行するもの	12	5	41.7%	0.0%
	その他のもの	3,597	3,301	91.8%	21.3%
	小 計	3,609	3,306	91.6%	21.3%
合 計		13,542	15,509	114.5%	100.0%

(表5-b) 最近10年間の書籍・雑誌関連品目の輸出額の推移

年度	書籍・辞典・絵本			新聞・雑誌・ その他定期刊行物			合 計		
	輸出額	前年比	指数	輸出額	前年比	指数	輸出額	前年比	指数
2004	11,330	88.5%	100	4,492	104.9%	100	15,822	92.6%	100
2005	10,342	91.3%	91	4,587	102.1%	102	14,929	94.4%	94
2006	11,159	107.9%	98	4,580	99.8%	102	15,739	105.4%	99
2007	11,831	106.0%	104	4,810	105.0%	107	16,641	105.7%	105
2008	10,816	91.4%	95	4,717	98.1%	105	15,533	93.3%	98
2009	11,358	105.0%	100	4,593	97.4%	102	15,951	102.7%	101
2010	14,425	127.0%	127	4,974	108.3%	111	19,399	121.6%	123
2011	10,608	73.5%	94	4,305	86.6%	96	14,913	76.9%	94
2012	9,933	93.6%	88	3,609	83.8%	80	13,542	90.8%	86
2013	12,203	122.9%	108	3,306	91.6%	74	15,509	114.5%	98

(表6) 最近10年間の書籍・雑誌の輸出入額比率の推移

年度	輸 入		輸 出	
	金 額	比 率	金 額	比 率
2004	51,661	77%	15,822	23%
2005	50,120	77%	14,929	23%
2006	51,919	77%	15,739	23%
2007	50,904	75%	16,641	25%
2008	44,529	74%	15,533	26%
2009	36,975	70%	15,951	30%
2010	34,783	64%	19,399	36%
2011	32,247	68%	14,913	32%
2012	29,780	69%	13,542	31%
2013	32,163	67%	15,509	33%

## (3) 為替

貿易における為替の影響は極めて大きなものがあり、ビジネスにおいても結果を左右する大きな要素の一つとなっています。一方で、貿易統計においては、一定のルールで外貨から円貨に換算した金額にもとづいて集計されていますので、表面的には為替の影響が見えにくい状況となっています。表7はここ5年間の主要4通貨のレートの変動を示したものです。対象通貨は、財務省が発表している「貿易取引通貨別比率」においてほぼ99%を占める5通貨から円を除いた4通貨です。表からは、2009年からの円高傾向が2012年にピークを迎え、アベノミクスや日銀の異次元緩和によるものかも知れませんが、一転して2013年には円安となっていることが確認できます。こうした為替の動きが貿易統計にどのような形で反映しているのかを見るための一つの方法として、「貿易取引通貨別比率」をもとに、年度毎の通貨別の輸入額(円)を算出し、更にその年度の平均為替レートから輸入原価(計算原価)を算出してみました。表8は、この輸入額と計算原価の変動比率から年度毎の加重平均値を算出したものです。あくまでも計算上の数値であり、参考値として見ていただければと思いますが、貿易統計の輸入額と原価の変動の違いが確認できるかと思えます。例えば2013年は2012年に比べて輸入額は1.08と増加していますが、原価では0.93減少していることがわかります。また、2004年との比較では輸入額、原価ともに大きく減っていることが確認できます。前段で、2013年の輸入額が原価ベースでは減少していると推測しましたが、この表の数値が一つの根拠になるかと思えます。

(表7) 主要通貨の為替レートの変動

通貨	年平均レート											
	2008		2009		2010		2011		2012		2013	
	TTS	前年比	TTS	前年比	TTS	前年比	TTS	前年比	TTS	前年比	TTS	前年比
米ドル (USD)	104.46	94.57	90.5%	88.81	93.9%	80.84	91.0%	80.82	100.0%	98.65	122.1%	
米ドル税関レート	104.23	93.52	89.7%	88.09	94.2%	79.97	90.8%	---	---	---	---	
ユーロ (EUR)	153.94	131.70	85.6%	117.89	89.5%	112.62	95.5%	104.13	92.5%	131.18	126.0%	
ユーロ税関レート	153.86	130.14	84.6%	117.25	90.1%	111.38	95.0%	---	---	---	---	
英ポンド (GBP)	196.50	150.35	76.5%	139.60	92.9%	132.06	94.6%	130.49	98.8%	156.70	120.1%	
スイスフラン (CHF)	96.83	87.15	90.0%	85.07	97.6%	91.10	107.1%	86.06	94.5%	106.25	123.5%	

(注1) 対象通貨は財務省発表が発表している「貿易取引通貨別比率」(輸入金額比率)の円を除く上位4通貨

(注2) レートは、三菱東京UFJ銀行が発表している各通貨の月中平均相場の単純平均

(注3) 税関レートは、通関時に使用する「税関長公示レート」の年加重平均レート(2012年以降は集計されていない)

(注4) 前年比が100%以下の場合には円高、100%以上の場合には円安となる。

## (4) 参考資料

最後に、文部科学省が発表している「学術情報基盤実態調査」の数値を参考までにご覧いただければと思います。表9はこの調査結果から、洋書と外国雑誌、電子ジャーナル、電子書籍(e-Book)の実績を抜き出したものです。年度はあくまでも調査年度ですので実際に購入した年度とは異なりますので傾向として捉えていただければと思います。やはり冊子の減少が大きく、特に外国雑誌の減少は電子ジャーナルの伸びに置き換えられているものと思われる。上述しました書籍・雑誌の輸入額が年々減少している状況を裏付けるデータの一つとして見ることができるのではないかと思います。

(表8) 書籍・雑誌の通貨別輸入額および原価の変動率(貿易取引通貨別比率にもとづく加重平均)

区分	2004		2005		2006		2007		2008		2009		2010		2011		2012		2013		2013対2004		
	輸入額	計算原価	輸入額	計算原価	輸入額	計算原価	輸入額	計算原価	輸入額	計算原価	輸入額	計算原価	比率	平均									
合計額	0.90	0.97	1.04	0.98	0.87	0.83	0.94	0.93	0.92	1.08	100.0	0.62	***										
米国ドル	0.91	0.98	1.00	0.99	1.01	0.98	0.97	0.89	1.01	0.79	0.88	0.96	1.02	0.93	1.03	0.93	0.92	1.10	0.90	0.99	72.2	0.67	0.74
円	0.89	0.89	0.91	0.91	0.95	0.98	0.98	0.86	0.86	0.97	0.97	0.91	0.91	0.91	0.91	0.90	0.90	0.99	0.99	22.5	0.52	0.52	
ユーロ	0.91	0.89	0.88	0.86	0.95	0.89	1.03	0.93	0.71	0.75	0.91	1.07	0.84	0.93	0.91	0.96	0.86	0.93	1.24	0.99	3.6	0.46	0.47
英国ポンド	0.74	0.70	0.86	0.85	1.04	0.97	0.98	0.89	0.66	0.80	0.83	1.08	0.94	1.02	0.62	0.65	0.92	0.93	1.35	1.12	0.3	0.35	0.45
スイスフラン	0.81	0.80	0.86	0.85	1.04	0.99	0.74	0.70	0.87	0.89	1.38	1.54	0.66	0.67	0.79	0.74	0.92	0.98	1.26	1.02	0.4	0.48	0.40
その他	0.90	0.90	0.89	0.89	0.89	1.03	1.03	0.83	0.83	0.83	0.83	0.89	0.89	1.04	1.04	0.97	0.97	1.19	1.19	1.0	0.60	0.60	
加重平均	0.90	0.95	0.97	0.96	1.04	0.99	0.98	0.97	0.88	0.96	0.84	0.91	0.94	0.99	0.93	1.00	0.92	0.92	1.08	0.93	***	0.63	0.68

(注1) 「貿易取引通貨別比率」から主要通貨の各年度ごとの輸入取引の使用比率を算出

(注2) 上記の比率をもとに書籍・雑誌の年度毎の輸入金額の合計から主要通貨毎の金額を算出

(注3) 上記の金額から年平均レートにもとづく原価(計算原価)を算出(円とその他通貨はそのまま)

(注4) 年平均レートは、2003年~2011年のドルとユーロは税関長公示レート、その他は三菱東京UFJ銀行発表のレートを使用

(注5) 「貿易取引通貨別比率」は貿易取引(輸入)全体の金額ベースの比率で、貿易統計に計上されたデータのうち貿易取引通貨が判明しているデータにもとづく作成。

(表9) 国公私立大学における図書館資料費に占める海外出版物の購入金額の推移

媒体		(単位百万円)												
		平成20(2008)年		平成21(2009)年		平成22(2010)年		平成23(2011)年		平成24(2012)年		平成25(2013)年		
		金額	対前	対2008										
冊子	洋書	10,044	9,087	90.5%	8,818	97.0%	8,019	90.9%	7,560	94.3%	7,409	98.0%	73.8%	
	外国雑誌	19,852	17,762	89.5%	14,751	83.0%	12,599	85.4%	11,473	91.1%	10,060	87.7%	50.7%	
	合計	29,896	26,849	89.8%	23,569	87.8%	20,618	87.5%	19,033	92.3%	17,469	91.8%	58.4%	
電子	電子ジャーナル	14,817	17,500	118.1%	18,992	108.5%	19,680	103.6%	20,821	105.8%	21,832	104.9%	147.3%	
	電子書籍	---	---	---	---	---	455	---	470	103.3%	640	136.2%	---	
	DB	---	---	---	---	---	3,181	---	3,421	107.5%	3,559	104.0%	---	
	合計	14,817	17,500	118.1%	18,992	108.5%	23,316	122.8%	24,712	106.0%	26,031	105.3%	175.7%	
合計	44,713	44,349	99.2%	42,561	96.0%	43,934	103.2%	43,745	99.6%	43,500	99.4%	97.3%		
その他(参考)	6,997	7,140	102.0%	7,827	109.8%	3,560	45.5%	3,255	91.4%	3,167	97.3%	45.3%		
図書館資料費総額	74,773	74,461	99.6%	73,792	99.1%	71,551	97.0%	70,516	98.6%	69,547	98.6%	93.0%		

(注) 数値は、文部科学省の「学術情報基盤実態調査」の結果報告にもとづく

尚、平成25年度「学術情報基盤実態調査」の結果報告については下記にて参照いただけます。

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/26/03/1345298.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/03/1345298.htm)

以上、2013年の貿易統計について、簡単ではありますが、報告させていただきます。不慣れなため分かりにくい点があるかと思いますが、ご容赦ください。不明な点や誤り等がありましたら事務局までご一報いただければ幸いです。

以上

CAMBRIDGE

IPCC

IPCC 第5次評価報告書  
第1作業部会報告書（自然科学の根拠）

## Climate Change 2013 The Physical Science Basis

Working Group I Contribution to the Fifth  
Assessment Report of the IPCC

This latest Fifth Assessment Report of the Intergovernmental Panel on Climate Change (IPCC) will again form the standard scientific reference for all those concerned with climate change and its consequences, including students and researchers in environmental science, meteorology, climatology, biology, ecology and atmospheric chemistry. It provides invaluable material for decision makers and stakeholders: international, national, local; and in all branches: government, businesses, and NGOs.

**Hardback 9781107057999 USD 190.00**  
**Paperback 9781107661820 USD 99.00**

Forthcoming...

Climate Change 2014: Impacts, Adaptation and Vulnerability: Global and Sectoral Aspects  
Subtitle Working Group II Contribution to the IPCC Fifth Assessment Report, Vol. 1

第2作業部会報告書（影響・適応・脆弱性）第1巻

2014 年末出版予定

**Hardback 9781107058071 USD 190.00**  
**Paperback 9781107641655 USD 99.00**

Climate Change 2014: Impacts, Adaptation and Vulnerability: Regional Aspects  
Subtitle Working Group II Contribution to the IPCC Fifth Assessment Report, Vol. 2

第2作業部会報告書（影響・適応・脆弱性）第2巻

2014 年末出版予定

**Hardback 9781107058163 USD 190.00**  
**Paperback 9781107683860 USD 99.00**

Climate Change 2014: Mitigation of Climate Change  
Subtitle Working Group III Contribution to the IPCC Fifth Assessment Report

第3作業部会報告書（気候変動の緩和）

2014 年末出版予定

**Hardback 9781107058217 USD 190.00**  
**Paperback 9781107654815 USD 99.00**



2014 年 3 月出版  
好評発売中

**950 pages**  
**609 colour illus.**  
**189 tables**

[www.cambridge.org/ipccreports](http://www.cambridge.org/ipccreports)

日本洋書協会会報 vol.48 No.3(通算528号) 発行日2014年5月1日 編集者 平野 覚

発行所 日本洋書協会 〒140-0002 東京都品川区東品川1-32-5 U.P.S. 内 TEL 03-5479-7269 FAX 03-5479-7307

URL:<http://www.jaip.jp> E-mail:[office@jaip.jp](mailto:office@jaip.jp)